

[北方林業研究室]C. その他 : 4. カンバ類直播造林試験

青木, 尊重
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

宮崎, 安貞
九州大学農学部附属演習林 : 助手

今田, 盛生
九州大学農学部附属演習林 : 助手

中井, 武司

<https://doi.org/10.15017/1456280>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和41年度, pp.146-147, 1967-07-10. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :



(2) 考 察

本年度の調査結果による ha 当り成立本数および平均樹高を、5 年前の昭和 36 年 7 月の調査結果と対照して示すと第 3 表のとおりである。なお本年度の結果は、2 plot の調査結果を合計し、その平均値として示したものである。

第 3 表 調 査 結 果 の 比 較

樹 種	比較要素	昭 36. 7(A)	昭 41. 8(B)	(B)－(A)
ド イ ツ ト ー ヒ	ha 当り成立本数	1,600 本	1,450 本	150 本
	平均樹高 (m)	0.67 m	2.48 m	1.81 m
ス ト ロ ー プ マ ツ	ha 当り成立本数	1,963	1,850	113
	平均樹高 (m)	0.79	2.76	1.97
グ イ マ ツ	ha 当り成立本数	1,925	1,750	175
	平均樹高 (m)	0.89	3.47	2.58
ヤ チ ダ モ	ha 当り成立本数	1,570	700	870
	平均樹高 (m)	0.35	3.93	3.58

第 3 表にみられるように、ドイツトーヒとストローブマツはほぼ同様の生長過程をたどつていると認められるが、グイマツは前二者よりも生長量が多い。ヤチダモはこの調査に関する限り、最も生長量が多い。ただしこのような結果になつたのは、ヤチダモ植栽地に天然更新によるヤチダモが混入しており、現在では植栽木と明確に判別することが困難となつており、天然更新木の一部をも調査に含めたためであり、また plot の設置位置にも原因があるものと推察される。したがつてヤチダモの生長量は、実際にはこの値より相当低いものと推測される。

植栽後 6 年間を経過したにすぎず、今後 5 年間隔で測定を継続し、今後の経過をみることにする。

4. カンパ類直播造林試験

カンパ類は本道の広葉樹の中で生長がはやく、短期育成林業の対象となる樹種のひとつである。そこでカンパ類造林の合理的方法を追求するため、ブルドーザによる地表処理を行ない直播造林

を試みた。

(1) 試験地概要

本試験地は、本演習林第5林班の標高400～450mの尾根筋付近に設定した。試験地周辺には30～35年生のシラカンバが点在し、それらが母樹となつて天然更新したと推定される4～5年生のシラカンバの小群落がみられる。本試験地は、そのシラカンバ天然更新林分に隣接して設定したもので、総面積は0.31haである。

(2) 地表処理および直播方法

地表処理はブルドーザで行ない、筋状にA₀層を除去して鉱物質土壌を露出させ、種子の着床発芽を容易にさせた。掻起し筋および掻寄せ筋の巾はともに2mである。

つぎに直播の方法は、地表処理地域を第4表のように区分し、シラカンバ、ヤエガワカンバ、ダケカンバ、ウダイカンバの4種をha当りに換算して約2.5Kgずつ播種した。なお播種は昭和41年9月20～25日の間に行なつた。

第4表 樹種別面積

樹 種	面 積 (ha)
シ ラ カ ン バ	0.054
ヤ エ ガ ワ カ ン バ	0.078
ダ ケ カ ン バ	0.062
ウ ダ イ カ ン バ	0.116